

インタビュー：  
関係をつなぐ

—書物が結ぶ人、地域、アート、そしてファッション

アート・ディレクター 北川フラム

POWER OF PRINT: CONNECTING PEOPLE, COMMUNITIES, ART, AND FASHION

Fram KITAGAWA, Art Director

Fram Kitagawa is an art director who has been organizing large-scale art festivals in rural areas in Japan, such as the Echigo-Tsumari Art Triennale and Setouchi Triennale. In 2010, he published the official guidebook of Setouchi Triennale in the form of an extra issue of the art magazine Bijutsu Techo, which sold 92,000 copies in total. According to Kitamura, the guidebook was issued in the form of paper media instead of electronic media such as an Internet document or mobile app because a book provides a convenient way of viewing the entire contents and enables the reader to browse pages forward and backward freely, matching the pace of readers' thoughts and behaviors.

In Daikanyama, Tokyo, where he is based, Kitagawa plans to create an urban village, intended to be a small village-like community where urban Daikanyama residents will be linked to each other. He has launched a magazine, Daikanyama Hillside Terrace Tsushin, to which people associated with Daikanyama contribute, and established the Hillside Library, which has a collection of books recommended by 100 well-known people. When a large bookstore opened in the area, he organized several meetings between the store management and Daikanyama community, succeeding in developing a good relationship between them.

What can be seen commonly from the Setouchi Triennale and Daikanyama community, both of which Kitagawa is associated with, is that books form knots that tie people together. In Kitagawa's activities, books and paper play important roles as media that connect people successfully with as appropriate reach.

## 北川さんの仕事と紙媒体

**KCI:** 北川さんは、アート・ディレクターとして、都市と地方を結ぶさまざまなアート・イベントを成功させています。多様な形で生み出される美術作品という成果物を、ひとつのコンテンツにまとめ上げ、発信する作業は、出版物の編集においても参考となる部分が多いと思います。また、出版についても多くの経験を持っていらっしゃると思います。そうした活動を通じて北川さんが考える書物のあり方や魅力的なコンテンツについて、お話をお聞かせください。

**北川:** 一般的に、私はコンテンポラリー・アートに深く関わっている人間だと思われています。1994年にファーレ立川のパブリック・アート事業に始まって、2000年から関わっている越後妻有アートトリエンナーレ、2010年に始まった瀬戸内国際芸術祭、他にもいくつかのプロジェクトをお手伝いしています。今やっていることは地域づくりなんですね。20世紀は都市が万能とされてきましたが、今の世の中で生きていくってことを考えると、都市だけでは限界があって、もう一度、地方を見直したほうがいい。都市と地方のエクステンションが現在の私のテーマです。

別の見方をすると、いわゆる西洋の「ファイン・アート」の文脈で語られることの多い「美術」という言葉は、文字通りには「美」の「術」で、人の手が関わる方法というか、「術」という言葉は文明とか自然とか社会とか人間の関係を表してきました。彫刻や絵画はその一部でしかない。特に日本の場合、明治以降の美術の定義からして、欧米の流行をいち早くとらえることが先進的なことだとされていて、現代美術も「わかる」「わからない」で問われ、楽しむことや「好き」「嫌い」で判断されるものではなく、なっていることが問題だと思っています。

ですから私たちのプロジェクトではジャンルを問わずに作品・アーティストを取り上げてきました。最近は食や衣服の領域への興味も大きくなっています。このところパフォーマンス系のアーティストに参加してもらうことが増えているのですが、服飾に対するセンスのある人が多いですね。彼らはいろんな形で地元の人とかかわりを深めることができるし、見ていて楽しい。衣や食、それに地域の祭りとか、家の庭や床の飾りとか、みんなが関わりやすいものを取り入れることは、越後妻有や瀬戸内のような地域のプロジェクトには大切なことです。それに、都市は生活しにくいと無意識に思う人が増えているみたいですね。だからそういった地域に足が向くのではないのでしょうか。

2010年の瀬戸内国際芸術祭の時に『美術手帖』の増刊号として出版した公式ガイドブックが9万2千部発行されました。この芸術祭に来る方にとって、拠点となる高松までは距離がどうであれ、すんなりと行くことができる。そこから、「どう行くんだろう」、「泊まる

「そこはあるのか」と自分で考え出す。「旅」という要素があったというのが大きいですね。ウェブサイトや携帯のアプリで情報を得ることもできますが、ピンポイントでしかわからないことが多い。全体を見ようと思うとやはり紙媒体の方が使い勝手がよいわけで、それがガイドブックが売れた理由のひとつと考えています。

**KCI**：そうですね。ぱらぱらとめくることで全体を俯瞰したり、好きなところや目に留まった箇所まで読み飛ばしたりできるのが、紙媒体の利点だと思います。電子媒体でそれをするのは難しいです。

**北川**：私たちの思考ペースと合っているんですよ。人と話していると、少し前に話したことが気になって、「ところでまたさっきの話だけど」となったりしますよね。紙媒体でもそうやって戻ることが容易にできる。他のメディア、例えば、映像だとそれは難しい。情報量も多くて、考える暇なく情報が素通りしてしまう。そしてすぐには戻れない。一方的です。それで考えると、紙媒体のように、リアリスティックというか、相互間の押し合いへし合いがあることが重要だと思っています。

**KCI**：読み手の思考や動作と媒体とかうまくインタラクションできるということですね。

**北川**：今は、最新で最大の情報を最短でアクセスすることが、効率という名の下で大きく価値を持っていますが、実際には最大の情報も最新の情報もほとんどの人にとってはなくても構わないものです。情報処理量を単純に人間の価値に変えている今の風潮に対しては相当違和感を持っています。それは単に要領よくやればよいという話じゃないですか。そういうのはあまり好きではありません。

**KCI**：最近では、ビッグデータの活用とか、あまり関係ないような人も話題にしています。

**北川**：ひとりの人間の能力を考えると、例えば私の場合、アーティストの選定にしても、全部を調べてから決めるなんてできるわけがない。全部を調べたとしても、結局は、自分の持っている価値観や成り行きで選ぶことになる。それであれば、もう少し違う関わり方を採った方がいい。話はそれますが、そういうこともあって私は、「フェイス・トゥ・フェイス」と地域を大切に活動しています。

## 都市の中の本

**KCI**：この春、北川さんの監修で『代官山ヒルサイドテラス通信』が創刊されました。「ミナペルホネン」の皆川明さんも寄稿していたり、代官山にゆかりのある人が誌面に登場しています。越後妻有や瀬戸内といった地域から、(主宰するアートフロントギャラリーがある)代官山という都市に戻ってこられたのはどのようないきさつがあったのでしょうか。雑誌創刊の経緯も教えてください。

**北川：**代官山は、代々の地主である朝倉家の人々と建築家の槇文彦さんによるヒルサイドテラスを中心とした街の景観づくりから始まって、ソフト面の充実ということで私が呼ばれました。そして長くこの街の地域づくりに携わってきました。今や私の仕事のベースとなる場所で、ほとんどの時間を過ごす場所です。私の場所はここだ、という思いもある。

代官山の良さは、住居とオフィスと店舗が程よく同居しているところにあります。地域におけるコミュニティについて、阪神淡路大震災の時の経験からですが、ひとつの村落、小学校の校区ぐらいの規模が、人々のつながり具合として適正だと思っています。越後妻有も、今は町村合併で非常に大きなまとまりになっていますが、それまでは集落単位で生活してきたわけです。車社会になるまで、半年、雪に閉ざされて、集落の中でみんなが手伝いあう。今もそのつながりが残っています。

代官山も、ひとつの「アーバンヴィレッジ（都市の中の村）」を目指しています。その中で重要な役割を担う場所が、図書室だと考えました。本って、個人ではそんなにたくさん集められませんよね。でも時々ぺらぺらとめくってみたい。ホテルのロビーで、普段読まない本が置いてあると手に取ってみたいくなりますし、それを読んでいる二、三十分は楽しいですね。そこで、ヒルサイドテラスの中に「ヒルサイドライブラリー」という私設図書館を開設しました。100人の方に声を掛けて、ひとり10冊ずつ紹介してもらって、そうして集めた本を開架しています。ヒルサイドライブラリーがきっかけで、クラブヒルサイドという会員組織もできました。

読書会も開催しています。「少女は本を読んで大人になる」というテーマで、女性ゲストが自分のエピソードを交えながら古典的名作を読んだり語ったりする会です。森本千絵さんが『赤毛のアン』、小林エリカさんが『アンネの日記』。竹下景子さんは石牟礼道子さんの『苦海浄土』を取り上げていました。誰に薦められたかは、その本を読むきっかけとして重要だと思います。

それから、2011年に蔦屋書店が代官山に出店しようとした際、街の景観やヒルサイドライブラリーの活動などについて理解を深めてもらおうと話し合いの場を何度か持ちました。こうした積み重ねがあるので関係は良好です。地域づくりでは、居住者が協力し合える体制を作ることも大切です。

そうした中で、サロン誌みたいなものがあるとコミュニティ上いいなあ、とささやかにやり始めたのが『代官山ヒルサイドテラス通信』です。気楽にやろうということで、執筆者の多くがこの地域の関係者です。

クラブヒルサイドの活動のテーマのひとつは、本を通じて色々な人たちの関係をつないでいくこと。本が果たす役割の大切さを地域の中でもっと根付かせたい。そうした活動の

素晴らしい例として、本を使った地域づくりに懸命に取り組んでいたところがありました。福島の飯舘村なのですが、図書館の他に「ほんの森いいたて」という本屋を村で経営していたんです。図書館があれば村民の読書のニーズは満たせるかもしれないけど、やっぱり自分の本を持ちたい欲求もある。私は貸本屋の息子でした。そして今は「現代企画室」という出版社をやっています。だからそういった気持ちはよくわかります。

**KCI**：先ほど触れられていたパフォーミング・アートのように、コミュニティの中で、ある程度の広がりを持って人々をうまく結び付けて巻き込んでいく……。

**北川**：そうした媒体のひとつに本や紙はなっています。

### 多様性のあるファッション

**KCI**：KCIは1982年から研究誌『ドレスタディ』を刊行して、服飾史やファッションに関する研究の成果を広く発信することに努めてきました。日本国内においては、そういった分野に興味を持つ方々を結びつける役割を多少なりとも果たしてきたと思います。北川さんも本誌をご覧いただいているとうかがいまして、どういった視点で読んでいらっしゃるのか非常に興味を持っています。

**北川**：『ドレスタディ』は毎号送っていただいています。すべて目を通すことはできていませんが、必要な時に読めるよう保存しています。ベーシックな部分をしっかり押さえながらやっている研究誌で、非常に面白い。デザインもきれいですよね。

私にとって服飾は多様さを感じさせる領域です。国の管理が割と入りにくい。素っ裸になるとまずい、という程度で他に何か言われることが少ないですね。食べ物の場合、管理が厳しい反面、その枠さえクリアすればいいということになってしまっていて、時々問題になるわけです。都市についても同じことで、効率的に管理しやすいからといって、職住を分離したり、世帯を均質化したりすることの危うさは強烈に感じています。人間関係もそうだし、多様さが全体の何かを保証していくような世界がいいなあと思っています。そういう意味もあって、都市の中の田舎的要素が重要なんです。

美術でこだわっているところもそういう部分です。問題を解く時、普通なら正しい答えがあって、それにたどり着くのがいい、早ければ偉いと言われます。一方で美術は、人と違う回答をして褒められることがある唯一のジャンルです。70億人がそれぞれ違うという前提が美術のベースにはある。それが私はいいなあと思っています。そうした美術と非常に近いところにファッションがある。

**KCI**：ファッションの歴史で見ると、近代、特に20世紀は、既製服産業の発達と西洋ファッションのグローバル化で、みんなが同じような服を着るという流れになっていたと言え

ます。それが最近、特に若い世代を中心に、たくさん作ってたくさん売る形ではなく、少量でもいいから届く範囲で服を届けていくという姿勢に作り手になっているのが面白いです。

**北川:** 前回の瀬戸内国際芸術祭の時に、KCI チーフ・キュレーターの深井晃子さんから「若手で面白い人」ということで、岡山の POTTO というブランドのデザイナーを紹介していただきました。彼も、そういった作り方をしている、いいなあと思いました。

以前、槇文彦さんがよく言っていました。「日本は何がいいかというと、建築だろう、漫画だろう、それで、ファッションだろう。なぜかというと、国が守らなかったからだよ」って。在野が需給関係の中で作ったものが日本独自の面白さに結びつくというのは重要な指摘です。

私はクリストのプロジェクトに関わったこともあるのですが、三宅一生さんの服はクリストの作品に通じるものを感じます。体を包み込むことで、そこに流れる風が縦横になるところが三宅さんの服にはある。川久保玲さんもいつも面白いことを考えていて興味深いですよね。普通は途中で種切れしたり、疲れきってやめたりしてしまって、彼女のように継続して創作を続けることができる人はほとんどいません。

それから、私は今、千葉の市原湖畔美術館の運営にも関わっています。いつかファッション展をやりたいと思っていて、機会があれば KCI へ相談しに行きたいです。

**KCI:** 私どもでお役に立てるのであれば、是非ともお手伝いさせていただきます。本日は、芸術祭、都市、地方、そしてファッションが書物というキーワードでつながっていく非常に刺激的なお話をうかがうことができました。ありがとうございました。

(聞き手：石関亮)

#### 〈図版〉

- Fig. 1. 公式ガイドブック  
Official guidebooks.
- Figs. 2. 『代官山ヒルサイドテラス通信』2号 2014-15年秋冬  
*Daikanyama Hillside Terrace Tsuishin, Vol.2, Autumn-Winter 2014-15.*
- Figs. 3. ヒルサイドライブラリー 撮影：新津保建秀 写真提供：クラブヒルサイド  
Hillside Library, photo by Kenshu Shintsubo. Courtesy of Club Hillside.
- Figs. 4. ヒルサイドライブラリー読書会（クラブヒルサイドでは読書会・講演会・勉強会等を定期的に行っている。） 写真提供：クラブヒルサイド  
Reading Circle in Hillside Library. Courtesy of Club Hillside.

#### 北川フラム (Fram Kitagawa)

1946年、新潟県生まれ。アート・ディレクター。アートフロントギャラリー主宰。「台地の芸術祭 越後妻有アートト

リエンナーレ」「瀬戸内国際芸術祭」「いちほらアートミックス」総合ディレクター。ヒルサイドテラス・代官山の文化・まちづくりに携わり、クラブヒルサイドのディレクターもつとめる。主なプロデュースとして、現在のガウディブームの下地をつくった「アントニオ・ガウディ展」(1978-79)、日本全国 80 校で開催された「子どものための版画展」(1980-82) 等。長年の文化活動により、2006 年度に芸術選奨文部科学大臣賞 (『芸術振興部門』)、2007 年度に国際交流奨励賞・文化芸術交流賞を受賞。

(※肩書は掲載時のものです)